

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 18 日現在

機関番号：32809

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520599

研究課題名（和文） 『日本霊異記』における地域関係説話の形成と伝承

研究課題名（英文） Formation of the Nihon-ryoiki full regional relationship tales and traditions

研究代表者

三舟 隆之 (TAKAYUKI MIFUNE)

東京医療保健大学・医療保健学部・准教授

研究者番号：20418586

研究成果の概要（和文）：

本研究は、『日本霊異記』の地域関係説話がどのように形成され伝承されたかを考察することを目的とし、いくつかの地域で同類異話や同じモチーフの説話などの複数の説話から地域的な共通項を検証し、原説話の伝承ルートの復元を試みた。その結果、『霊異記』の地域関係説話は、中央の官僧からもたらされた説話のモチーフを用いて、地域の唱導のために創作された説話であり、国府・国分寺を中心として分布するところから、在地の国分寺僧などが創作した可能性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study was how this research is formed and "Nihon ryoiki" of regional relations, or that was handed down, validate the regional common in some regions from such likes different stories and the same motif of multiple narratives, tried to restore the original narrative tradition route. As a result, the first record of regional relations "is a narrative was the creator of the regional mitibi for using the motif of the tales were brought from Central Government monk of Kokubunji Temple monks, such as you pointed out might created nationalist government, Kokubunji, distributed mainly from to.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
20年度	600,000	180,000	780,000
21年度	500,000	150,000	650,000
22年度	500,000	150,000	650,000
23年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2100,000	630,000	2730,000

研究分野：日本古代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：古代史

1. 研究開始当初の背景

『日本霊異記』は仏教説話で、従来から文学説話として、私度僧の活躍や衝動のためのテキスト集としての性格などが注目されてきたが、説話の形成については、編者

の景戒による創作という説や、また中国の『冥報記』などの説話の翻案という説もあり、歴史史料としての評価は低かった。

しかし最近では『日本霊異記』の説話の中に史実性を見いだそうという研究が主

流になり、また古代史研究でも古代社会の様相を示す史料として注目を浴びてきたが、その史料性についての実証が行われないうまま、関連する史料の一部だけを用いて議論を行っているのが現状であった。『日本霊異記』の説話が誰の手によって形成され、伝承されたのかという研究はまだ不十分な状態である。

とくに地域関係説話については、個別の説話自体の研究は若干あるものの、複数の関係する地域全体で検証を行い、地域史の資料として活用することはほとんど無かった。『日本霊異記』上中下巻百十六説話のうち、地方説話は全体の三分の一にあたるが、編者の景戒がこれらの地方説話をどのようにして入手し、編纂したのかについてはほとんど明らかにされていない。

この研究の進展の遅れは、研究方法に原因があると思われる。すなわち文学的観点からは因果応報の原理を景戒の心性に求めようとし、中国の『冥報記』などの文献との比較を行うことは重要であるが、日本における形成過程については全く議論されていない。また古代史側では、私度僧研究の範囲に留まっていたという問題がある。これらの問題を解決するためには、『日本霊異記』がどのような階層によって形成され、伝承されたかという原点に戻る必要があり、むしろ地方関係説話の形成に目を向けるべきであろう。

2. 研究の目的

そこで『日本霊異記』の地域伝承を実証的に検討し、古代地域説話の成立過程を明らかにすることによって、『日本霊異記』が地域史研究史料として価値のあることを実証し、現在の『日本霊異記』研究が今後進展することを目的とした。

また説話の内容の検討ばかりでなく、説話形成の地域の全体像を検証することで、地域の古代の様相を明らかにすることも目的としている。例えば、古代の地名を『和名抄』・『風土記』などや中・近世などの史料、現在の地名から推定し、さらに文献史料などから地域に存在した氏族を推測し、地域の古墳や郡衙、国分寺や地方寺院などの遺跡・遺物からその地域の特色を明らかにすることによって、『日本霊異記』の地方説話の舞台を復元することを目的とした。

また考古学的遺物などの検討から、地方寺院間のネットワークや交通路の復元から、地方と中央の仏教伝達のルートが明らかにすることができ、在地でどのような形で説話が形成され伝承されて、景戒のもとに伝達されたのか、そのルートの復元も目的としている。

その結果、『日本霊異記』を地域史の史料として活用することが可能となり、今後の『日本霊異記』研究が進展すると思われる。このように地域史の観点から研究を行うことによって、『日本霊異記』研究の学際的研究は進展すると思われる。

3. 研究の方法

まず『日本霊異記』の中で複数の説話が残る地域を選び、地名や在地氏族名を文献史料などから推測し、該当地域の国分寺や地方寺院などの遺跡・遺物からその地域の特色を明らかにすることによって、『日本霊異記』の地方説話の舞台を浮かび上げることを行った。

そこでまず研究の対象となる地域を特定する必要があり、『日本霊異記』の地域関係説話の一つの国で複数の説話が存在する地域を研究の対象とした。

紀伊国では十三話の説話が集中し、他地域と比較しても説話数が圧倒的に多いので、紀伊国は景戒の出身地であるという見解も存在するところから、今回の検証の対象からは外している。

それに続く三話が存在するのは、讃岐・武蔵国であり、この内同じモチーフを用いたと考えられる讃岐国の説話を検証対象とした。その他、瀬戸内海の水上交通が背景として存在する備後国、河川交通から流通経済が存在し、そのルートの上に説話が伝承された可能性を予測できる美濃・尾張国、山岳信仰の発展や修行僧の場である山岳寺院が多数存在する加賀国などは、説話の形成と伝承過程を明らかにすることができる地域と思われる。

また畿内周辺でも、蟹報恩譚（南山城・大和）や化牛説話（大和・伊賀）についても、全く類似する説話であるので、伝承者が同一である可能性があり、調査の対象とした。

とくに僧侶の移動を示す説話である肥後国などの九州関係説話や、海上交通の存在を示す陸奥国については、古代の仏教説話の伝承を考える上で重要と思われる。この比較によって、『日本霊異記』の地域関係説話がどのように伝承されたかそのルートを明らかにすることができた。

研究方法としては、以下の方法で各地域の説話と地域の検証を行った。

(1) 説話の内容

- ① 同じモチーフを用いているか
- ② 同類異話であるか
- ③ 中国の『冥報記』や『搜神記』などの説話の影響を受けているか。

(2) 地域の古代的様相

- ①国府・国分寺の位置
- ②説話に登場する氏族の位置や勢力を示す遺跡・遺構・遺物
- ③地方寺院の存在

(3) 交通路の復元

- ①七道と駅路・伝路の存在
- ②駅家の位置
- ③そのほか海上・河川交通の存在

以上の検討課題を共通項として、それぞれの地域の説話と古代的様相について検証を行った。

4. 研究成果

先述した、3. 研究方法に基づいて、各地域の説話と地域の古代的様相を調査して、以下の調査知見が得られた。

(1) 説話の内容

説話の内容については、一つの国で同じようなモチーフがある地域を検討した。

その結果、

①備後国では、上巻第七縁と下巻第二十七縁は、動物と髑髏の違いはあるが、いずれも報恩譚である。また讃岐国では、中巻第十六縁・二十五縁、下巻第二十六縁はいずれも地獄冥界説話でモチーフは共通する。

②九州関係説話の説話について、筑前国を舞台とした下巻第三十五と三十七縁は同類異話であり、また上巻第三十縁も地獄冥界説話でモチーフが共通する。

一方、畿内周辺に分布する蟹報恩譚（南山城・大和）や化牛説話（大和・伊賀）は、全く同一の同類異話であり、伝承者が行基集団などの可能性がある。

③中国の『冥報記』や『捜神記』などの説話の影響については、備後国では『捜神後記』を参照していた可能性が高く、讃岐国や筑前国でも『冥報記』の影響が見られ、各地域にこのような中国の『冥報記』などの説話のモチーフが伝播していたことが考えられる。

今回の調査の対象ではないが、信濃国の下巻第二十二・二十三縁など、同じ地域で同類異話やモチーフが共通する例は少なくない。

(2) 地域の古代的様相

各地域において、説話の舞台となる地域では、実地調査の結果、いくつかの共通点が見られた。

①国府・国分寺の位置では、説話の舞台とな

った地域は、国府・国分寺が存在する当該地域か、もしくは隣接する地域であった。

②説話に登場する氏族の位置については、説話の舞台となった郡の郡司層や在地有力者層が主人公であり、『和名抄』や文献からその本拠地を想定することが大方できた。そして古墳・古墳群などの分布からもその勢力地を想定することができた。

③地方寺院の存在

またこれらの説話の舞台となった地域には、必ず古代寺院が存在しており、在地での仏教活動が背景にあって、このような説話が形成され、伝承された可能性を示唆している。説話の形成や伝承に、地方寺院間のネットワークが存在していたことは、備後国や讃岐国の例でも明らかである。また加賀国では山岳寺院の存在から、修行僧が説話の形成に関与した可能性がある。

(3) 交通路の復元

交通路の復元では、歴史地理学の視点から、七道を中心とする官道の存在が、説話の形成に影響を与えていたことが想定された。

①七道と駅路・伝路の存在では、備後国・讃岐国の説話は、いずれも国府・国分寺を中心とする山陽道・南海道沿いに分布していた。これは九州関係説話や美濃国などでも、説話が官道沿いに分布していることを指摘できる。

②同様に、説話の存在する地域では、官道の駅家が存在することが少なくない。また美濃・尾張国では市の存在も重要であり、このような場で行われていた唱導の説話が『日本霊異記』の説話の原説話となった可能性も想定できる。

③そのほか海上・河川交通では、東北や九州地方の説話では海上交通の存在を指摘することができる。従来、これらの地域への交通は陸路を中心に考えられてきた。『日本霊異記』の説話の海上交通については疑問視されることが多かったが、今回の研究成果でその点を明らかにすることができたことは、評価される。

また備後や加賀国でも説話の舞台となった地域に、津などの海上交通の要地や市の存在が認められる。

さらに尾張・美濃国の道場法師関係説話の形成や伝承は、明らかに河川交通の存在によるものである。

以上のような調査成果によって、以下のような研究成果が得られた。

(1) 備後や讃岐の説話の背景では、国分寺を中心とする地方寺院間のネットワークの存在が背景にあり、特に山陽道や西海道などの主要幹線道上で説話が移動したことを確認できた。また九州でも説話の伝承ルートが大宰府を中心とする交通路上にあり、駅家を利用した可能性があるところから、伝承者が自度僧だけでなく官僧の可能性もあると思われる。

(2) 交通路については、九州だけでなく東北地方においても海上交通路を利用していた可能性を証明でき、また尾張・美濃では河川を利用した水上交通の存在も指摘できる。このような交通路の上を僧侶が活発に移動した結果、『日本霊異記』の地域関係説話が生み出されたものと思われる。

(3) 原説話の創作者は自度僧や地方僧が考えられるが、それを整備したのは、説話の残る地域に国分寺が存在するところが多いところから、国分寺僧などの官僧の可能性が高いと思われる。

下巻十九縁では中央の官僧が地方寺院で法会の講師などを務める事例が見え、とくに『冥報記』などの中国の説話のモチーフを伝えたのは、このような官僧であろう。このような官僧は国師として在地での仏教活動を行っており、国師は国分寺に居住し国分寺僧を指導したと考えられているところから、このような関係の下で、中央から『冥報記』などの説話のモチーフが伝わったと思われる。

(4) また同類異話の伝承ルートについては、行基集団のような、地方僧を中心とした知識が存在していたと思われる。

(5) そのような地方仏教の拠点としては地方寺院の存在が考えられ、在地での仏教信仰を発展させる原動力となったとも思われる。

最後に仏教説話だけでなく在地伝承の一形態として、丹後の羽衣伝承・浦島伝承などの古代地域伝承がどのように形成され伝播したのか、調査・検討を行った。その結果これらの『風土記』の伝承は『日本霊異記』の地域関係説話とは異なり、他地域に伝播・拡散することはない。同じように中国の説話の影響を受けて、在地で成立した説話ではあるが、『日本霊異記』の説話と違って他地域との交流がないのは、やはり伝承者の問題であろう。説話の形成者がある程度の学識があっても、やはり伝承者や伝承ルートが背景になければ、このように全国各地に広まっていくことはない。『日本霊異記』の説話は、その背景に仏教僧の在地での唱導活動があって、初めて伝承される意味があることが、この比較によって明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 三舟隆之、『日本霊異記』地方関係説話形成の背景―備後国を例として―、『日本歴史』、査読有り、758号、2011、1-17、

② 三舟隆之、『日本霊異記』地獄冥界説話の形成―讃岐国の説話を中心として―、『續日本紀研究』、査読有り、395号、2011、1-20、

③ 三舟隆之、『日本霊異記』九州関係説話の成立』、査読有り、47号、2012刊行予定(再校終了)、

〔学会発表〕(計1件)

三舟隆之、『日本霊異記』九州関係説話の成立』、説話文学会、2011、6、26、新潟大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三舟 隆之 (Takayuki Mifune)

東京医療保健大学・医療保健学部・准教授

研究者番号: 20418586